



「日本の空をみつめて —気象予報と人生—」

倉嶋 厚 著

岩波書店, 2009年 8月
250頁, 2000円 (本体価格)
ISBN 978-4-00-024265-3

著名な気象エッセイストである著者の72歳から84歳までの12年間に発表されたものをまとめたものが本書である。著者は「まえがき」において、「日本の空を渡る季節の美しさに強く惹かれ、…季節エッセイを書いた。…主として日本の季節、日本人の季節観や季節感を気象、気候資料で裏付けたもので、私はこれを勝手に『人文気象学的季節ノート』、『人文気候学的季節論』などと名づけてきた。ただし人文気象学・気候学の名称は、まだ市民権を得ていない。」と述べている。

まず、目次を示すと、

- I 空をみつめて
 - 青春の道標
 - 自己実現をめざして
- II 季節と言葉
 - 季節アルバム
 - 季節ノート
- III 人文気象学を求めて
 - 暑さと日本人
 - 気象から見た日本文化論の一例題—
 - 風水害の時代的変容と防災気象情報のゆくえ
 となっている。

第I部は新聞掲載の回顧録、第II部は新聞掲載の季節エッセイ、第III部が著者のいうところの人文気象学(気候学)と防災気象についての論考の部分である。

著者は「まえがき」において、これまでの著書との違いを、「八十歳代となり、…孤老の暮らしの中で、残り少ない日々に見つめている空への思いが強くて出ていることにある。「日本の空」に「一生の恋」をしてしまった一介の気象予報技術者の、たぶん「最後の著書」を、共感や批判とともに読んでいただければ…」と述べている。

ここでは著者の言うところの人文気象学についての論考が述べられている第III部について、少し評者の印象を述べてみたい。

第III部の「暑さと日本人」は現代日本文化論シリー

ズ(河合隼雄・佐藤文隆編:岩波書店)の第13巻「日本人の科学」(1996年)に所収されている論考で、この巻には他に、河合隼雄・佐藤文隆・山田慶兒・廣井脩・森毅・山根一真・黒田玲子・中山茂等々が論考を寄せており、非常に興味深い内容となっている。評者も出版されて直ぐに購入し、興味深く読んだ記憶がある。

この論考でも、和辻哲郎の「風土」等を引用しながら、議論を進めているが、評者が印象に残っているのは、著者が、社会状況の「無季化」、「無風土化」に注目し、「従来の気象風土論の破綻」、「郷土資料館的日本文化論の危惧」という項目である。ここで著者は、「現代にあっては、文化を形成する諸条件の変化があまりにも激しく速いために、文化もまた醸成されないままに常に流動状態にある。そして、これまで日本文化の特徴といわれてきたものの多くは、民族博物館、郷土資料館、…観光イベント、…宣伝活動などの中に温存されている感がある。」と、述べ、「深層には非常に慣性の強いゆるやかな流れ(ベクトル)があって表層の乱流を特定の方向に指向しており、それこそが各地域、各国の真の文化であり、精神的、社会的、歴史的風土というべきものに違いない。その深層のベクトルはどのような方法で見出し得るのか、その方法論は?…固定観念に拘束されない直観しかないのではないか?…」と述べている。論考が発表されたから十数年が経過しただけであるが、その当時と現在とでも我々を取り巻く状況は大きく変化している。新しい方法論を手に入れることは可能であろうか?

もう一つの論考である「風水害の時代的変容と防災気象情報のゆくえ」は、日本気象学会2005年度藤原賞受賞記念講演で、「天気」に掲載されている(52巻12号, 2005)ことから、多くの会員も読まれたことと思われるが、気象庁における防災気象業務の発展についてエピソード等を交えながら簡潔にまとめたものであり、特に気象業務に携わる方々には興味深い内容となっている。

著者は、本書の最後に「あとがきに代えて」と題して、幾つかの空の話題、「空の形」、「愛しい空」、「空の名残」、「老いの階段」、を述べている。しみじみとした文章であり、評者なども、その文章を味わう年齢となったことに気づかされた。

六十余年にわたって気象に関わる現場を歩んできた著者の日本の空と人生への思いが感じられる1冊である。(財)日本気象協会 藤谷徳之助